

「福井博士
頌寿記念 東洋文化論集」

木村 宣彰

この『東洋文化論集』は、その表題にも示されるように福井康順博士の知友でひろく内外の学会で活躍されている多数の学者が、同博士の古稀の寿を祝して、献呈されたものである。

福井博士は未開拓の学問分野であった道教の研究に先鞭をつけられ、『道教の研究』『道教の基礎的研究』などの名著によって知られる如く東洋学中での特異な思想的領域である道教の研究に多くの業績を残され、且つ久しく日本道教学会を統率して来られた斯学の重鎮である。然し同博士の学問的関心は単に道教の研究のみにはとどまるものではなく、極めて広汎に互り自由で且つ峻厳な批判的学风を以て望まれ、その成果は幾多の論文著作となって結実している。そのことは本書の巻頭に載せられている論著略表によって詳細に知られる所であり、今また「道教思想史研究」「佛教思想史研究」「神仙伝」等の著述が近く学会に提供されると聞きその不撓不屈の研究意欲に学会はひとしく注目している所であり、その出版が待たれる。

また同博士の学会・思想界に寄与された業績についても本書に附された略歴に示されている。このことも亦私が喋喋するまでもなく衆目の見知するところである。かくして古稀に到るま

でに積んでこられた学徳は、直接にその人格に接し、また博士の研究業績にふれる時、何人をも敬愛の念を抱かせずにはおかないであろう。この度、同博士頌寿のためによせられた「東洋文化論集」の七十九篇の論文——その中にはコレージュ・ド・フランスのR・A・スタン(Stein, Rolf A)、パリ大学のM・カルタンマルク(Kaltenmark, Max)、同じく陳祚龍、嶺南大学の洪淳昶ら六氏の外国の学者が含まれ、総計一三〇八頁——が正しくこのことを如実に示している。

さてこのように広範でしかも各方面から深く研究された論文を、もとより若輩の私がかこに全篇にわたって一々紹介し批評することはできない。そこで日頃私が関心を懐いている論文、殊に佛教に関するもののみを紹介し、佛教以外の論文については紙教の許す限り論題と執筆者を示すに止めることとした。福井博士並びに執筆者各位の御寛雅を願う次第である。

佛教に関する論文には次のようなものがある。いわゆるインド佛教と称されるものから紹介したい。特に原始佛教をあつかったものに西義雄氏の「原始佛教に於ける不死(甘露)について」、橋本芳契氏の「法句経の涅槃観」がある。前者は不死(amata)すなわち甘露の内容と、般若・無為・涅槃などとの関係を論じ、中国で amata を直訳して不死とせず甘露と義訳したのは翻訳者の巧みな配慮に由るものであったという意味を述べておられる。又、後者は法句経をテーマとして生死と涅槃観について考察したもので、浄土教との連関にまで及んでいる。

アビダルマに関するものに中村元氏の「アビダルマの縁起

説」があり、アビダルマ論書に於て縁起を有為法となす説、無為法となす説など縁起の解釈の種々雑多な説を整理し、それらに共通する立場は縁起を時間的生起の關係に於て解釈した点にあって、ここに中観派の相依説との相違があることを指摘されている。

大乘佛教・大乘經典について論じたものに、上田義文氏の「大乘佛教成立論に関する疑問」、宮本正尊氏の「The Middle Path Concept in History and Society」、中村瑞隆氏の「法華法鼓經における二三の問題点について」、渡辺照宏氏の「法華經梵語諸本の系統について」がある。先ず上田氏は大乘佛教成立に関する最近の学会の論調に対して疑問の一石を投ぜられた。すなわち、従来は大乘佛教を興したものを以て積尊の精神に還れと主張する在家の信者たちであったと見るのが一般であったが、氏によれば大乘經典は未だ佛陀に至っておらぬ在家人などというものでなくて、自ら佛陀となったという自覚をもった人が自らの思想を表現したものであると言われる。これは学界に波紋をおこすのではないかと思われる。宮本氏は歴史・社会の中で中道概念を問題にしておられる。すなわちアリアン開拓史上の「北方」「中国」「東方」の三期の歴史社会に於て如何に中道思想が形成され発展したかについて考察された。中村氏は大正大藏經の法華部に収蔵されている大法鼓經について、チベット訳を対照しながらその主題や法華經・泥洹經との關係等について述べられた。渡辺氏の論文は法華經の梵語原典として現存するネパール系写本、西域で発見されたペトロフスキー本・

カダリック本及びカシミールのギルギット本を対照し序品を例にして相互の異同を検討されたものである。

經典の翻訳には種々の問題が介在するが、かかるテーマを扱ったものに壬生台舜氏の「經典翻訳に現われた社会構造の問題」、干潟龍祥氏の「梵漢雜俎」がある。壬生氏は異質な社会構造を有するインドとシナの間で梵語經典が漢訳されるに際し、風俗・習慣の相違が見出されることを注意し、方位・家族制度などの例を引いて従来あまり取り扱われなかった問題を論ぜられている。干潟氏は以前智山学报で「梵漢雜俎」と題し、孟蘭盆・本無 (paṭhaṅga 如) 等の翻訳について考察されたが、今回は茶毘 (p. jāpeti, sk. kaśyapa) の音写語、蛇維・闍維・耶維など一について原音・音写理由を詳細にわたり論究された。又、*vi* 或は *ve* の音写に「随」が用いられる事実について推論されている。

次に中国の佛教を論じたものには、横超慧日氏の「天台教判の特色に関する一試論」、佐藤哲英氏の「四十二字門略鈔の本文並びに解説」、関口真大氏の「靈山直授と拈花微笑」、藤堂恭俊氏の「曇鸞の奢摩他・毗婆舍那観」、牧田諦亮氏の「隋長安大禪定寺智輿について」、道端良秀氏の「曇鸞と道教との關係」、柳田聖山氏の「善化の風狂」がある。日本・中国の多くの教判の中で最も学者の推称を得たものは天台智顛の教判であるが、横超氏は天台教判に対する後人の論評を紹介し、その内面的な特色をさぐっている。即ち、智顛の教判の特色を、証悟に基づく理論であることと、その構造が単に序列的・分類的なもので

なく、複合的・機能的な構造を有する点とに求め詳論された。

次に佐藤氏は、慧思の著作といわれる「四十二門」は散佚しその全貌を知り得なかったが、この度同氏が滋賀県坂本西教寺で発見された「四十二門略鈔」によってほぼその原型が推察し得るとなし、ここに「略鈔」の全文を紹介し且つその文献的価値を明らかにされた。関口氏は禪の拈花微笑と天台の靈山直授の本来の趣旨を明かし、かかる説話が形成された背景をさぐっている。すなわち、拈花微笑の説話は、付法蔵因縁伝の不備を補う為に十一世紀の中国で創作されたものであり、靈山直授の相承説は、最澄の明す所で両者は別個に成立したものであると論じ、我々自身の内に靈山直授・拈花微笑を認めねばならぬと言われる。藤堂氏は曇鸞の奢摩他 (Samatha 止)、毘婆舍那 (Vipassana 観) の注釈を通して、華北佛教界の止観実践の種々相、浄土教家としての曇鸞の特異性を究明された。また道端氏は曇鸞と道教との関係を論じ、道蔵に収められる「曇法師服氣法」は実は道教のものではなく佛教独自のものであること、また曇鸞が陶弘景に師事し仙方十巻を与えられたが、のちに焼き棄てたといわれる「仙方」を、従来は「衆醜儀」あるいは「抱朴子」といわれていたが、同氏は陶弘景の「本草集注」であると推論されている。牧田氏は「統高僧伝」等に見える智興の鳴鐘功德応報の説話の成立、伝承を論じた。柳田氏は臨済録等の文献批判を為しつつ所謂「普化の風狂」の原意をさぐっている。すなわち普化という人の行動が、はじめは中国人を魅了した佛者の神異のようなものでなくまた単に日常性のみでもないとし、

奇異にして極めて自然な、両者を統一したところに普化の意義があると論ぜられている。

チベットや西域の佛教を取り扱ったものに酒井真典氏の「文殊友の菩提心論について」、小笠原宣秀氏の「中世吐魯番浄土教の信仰形態」がある。酒井氏は文殊友 (Mañjuśrīmita) の菩提心論 (菩提心修習) を解説し和訳をせられている。小笠原氏はかつて「高昌国の佛教教学」(佛教史学論叢) と題し、吐魯番に於ける經典訳出及び流布について論じられたが、今回は特に浄土教の流布・浸透の経過を考察された。

直接に佛教を取り扱ったものではないが、中国思想と佛教との連関に焦点をあてた入矢義高氏の「空と浄」、大淵忍爾氏の「老子化胡説小考」などは佛教思想に関連する問題を別な角度から論じたものとして共に一読すべき論考である。

戒律を論じたものに平川彰氏の「律蔵の羯磨について」、佐藤密雄氏の「戒の解釈について」、恵谷隆戒氏の「円頓戒の戒体論について」、櫛田良洪氏の「西山教団の菩薩戒相承をめぐって」がある。前二者はインドにおける戒律論であり後の二者は日本佛教における戒律論であるが、その中すでに『律蔵の研究』の著書中で戒律に関する多くの研究を発表された平川氏は、ここでは特に羯磨の分類・人数などについて諸律を比較しながら論ぜられた。氏によれば律蔵で羯磨という時はサンガの「議決」を意味し、この制度は原始佛教の時にすでに成立しており人数も一定していたが、その種類は諸律において種々不同が生じたことを述べられている。『佛教教団の成立と展開』という大著

のある佐藤氏は、戒文の意味付けがその結戒の因縁の用い方や作り方に規定され、それはまた時代教学を反映していることを僧残法の無主作小房戒と波羅夷法の殺人戒とを例に引いて説明されている。次に円頓戒の研究者として知られる恵谷氏は最澄以後の諸師の戒体説を紹介し、結局は心法戒体説と色法戒体説に分類している。又、櫛田氏は円頓戒史上の法然を論じ、法然の社会的活動は持戒授戒の問題を離れては論じ得ないという観点から、念佛者としての法然ではなく戒師としての法然について詳論された。これに対し念佛者法然については、坪井俊映氏の「法然浄土教における一向専修の形成について」がある。すなわち法然の「往生要集釈」「無量寿経釈」の著述を手掛りとして法然の念佛思想の変遷、一向専修思想の形成について論じられた。同じく法然の開宗に関し浄土五祖相承説を扱ったものに香月乗光氏の「法然上人における相承説の問題」がある。

この外、日本佛教の方面では、伊藤真徹氏の「平安時代前期における浄土教信仰について」、平了照氏の「恵心僧都の観心略要集について」、荻須純道氏の「夢窓国師の浄土観」、大原性実氏の「親鸞の伝統する浄土の思想系譜」、石田充之氏の「Shōnin's Position in the History of the Eastern Thoughts」がある。まず伊藤氏は叡山の浄土教を往生者の教学・淨業・往生相の上から検討し、結局は思想的進展のプロセスを跡づけることはできないとしながらも、平生の行業・臨終の一瞬の行動に於て叡山の浄土教信仰を認めることができるという。平氏は天台浄土教家である源信の「観心略要集」をとりあげて、源信は

天台念佛を以て叡山教学全般を統一し末世に於ける天台宗の安心を西方往生に帰結せしめたと論じられた。荻須氏は夢窓疎石の念佛門に関する見解と及びそれに対する智演の反論とを紹介し、永明延寿を例にして中国における念佛禅実践者との相違にまで及んでいる。親鸞を論じたものに大原氏と石田氏との二篇がある。前者は教行信証真佛土巻を手掛りとして親鸞の浄土観を明かし、それが七祖中で特に曇鸞・善導の思想教義に負うところが多いことを論じられた。また石田氏は博く東洋思想史上に親鸞の位地付けを試みられている。

今、紙数の都合で佛教に関するものしか紹介できなかったが、その外にインド・中国・日本等にわたって種々の問題を扱った論文がある。即ち

一 インド 宗教・思想（佐々木・インド農民社会に於ける宗教的想念、金倉・慧月とブラジャスタバーダ）、民俗学（相葉・インドの拜火教徒の民俗、など）

二 中国 宗教・思想（根本・中国古典における「化」の思想について、など）、儒教・道教（木村・子貢について、窪・北周の通道観に関する一臆説、宮川・三国時代の道教史拾遺二則、など多数）、歴史地理（秋月・西山考、など）、経済（沢田・泰山香税考、など）、美術（大浜・中国画の思惟性、など）、文学（橋川・謝靈運「登池上楼」二首を讀みて、など）、民俗（洪・古代韓民族の大地及び穀物崇拜について、など）、書誌・文献（波多野・老子王注校正続補、呉・禪月集補遺、など）、キリスト教（山本・靈恩教会）

三 日本 思想（石田・愚管抄と慈円）、民俗（竹中・夜爪考、

小杉・鬼瓦に於ける二つの考察などの論文が収められている。本書の最大の特徴は、実にこの東洋学全般にわたり論文の内容が極めてバラエティーに富んでいる点にある。これは福井博士の博い学域とその交友の広さを如実に反映したものであるが、これによって日本の東洋学の全貌あるいは傾向を瞥見することができるであろう。

これだけの多種多量の論文を編集するということは、そのことに当った方の労が並々でなかったことは想像に難くない。但、望蜀の感として若干の気付いた点を叙べることが許されるならば、(一)論文の紙数の限定の為、論旨が先行し論証・資料批判の面で欠けると思われるものが目につくこと。又、執筆者自身と与えられた頁数で十分に意を尽さぬ旨を附記された論文がまま見うけられたが、余儀ないこととはいいなから編集上何らかの

配慮をくばることが出来なかったのであろうか。

(二)本論文集に限ったことではないが、特に本書は七十余篇にも及ぶ論文を収めているのであるから、単に羅列するということではなく、何等かの規準によって分類を試み一往の系統だった組織が考慮されてもよかつたのではなからうか。——例えばインド・中国・日本等の地域によって分けるとか、佛教・儒教・道教・その他というように分けるとか、方法があつたかと思う。

何れにしてもこの書が福井博士の頌寿ということを機縁として現在の日本の東洋思想学界の大勢を一括して示した見事な金字塔であることに疑ない。斯学が一九七〇年代にどれだけの進展を見せるかを期待しながら、我々は本書を以てそのための一指標となすことができるであろう。

(昭和四十四年十二月、早稲田大学出版部、A五版 七、〇〇〇円)